7 現代文 実践（説明的文章）

雑草はなぜそこに生えているのか (1)

皆(みな)さんは雑草を育てたことがあるだろうか。

雑草とは、勝手に生えてくるものであって、わざわざ雑草の種を播(ま)いて育てる※酔狂(すいきょう)な人は少ないだろう。

私は雑草の研究をしているので、雑草を育てる。ところが、雑草というのは、いざ育てようと思うと、なかなか簡単ではない。

まず、①<u>種子を播いても芽が出ないのだ。</u>

野菜や花の種子であれば、土に播いて水を掛(か)けてやれば、数日のうちには芽が出てくる。ところが、雑草の場合は土に播いて水を掛けてもなかなか芽が出てこない。そうこうしているうちに、播いてもいない雑草の方が芽を出してきてしまったりするから、難しい。

植物の発芽に必要な三つの要素は何だろうか？

教科書には、「水、酸素、温度」と書いてある。

そのため、暖かい時期に、土を耕して空気が入りやすいようにしてから種子を播き、水を掛けてやれば、水と酸素と温度の三つが揃(そろ)って芽が出てくるのである。

ところが、雑草はこの三つの要素が揃っても芽を出さない。

それは、雑草が「休眠(きゅうみん)」という性質を持つからなのである。

「休眠」というと休眠会社や、休眠口座など、働いていないという良くないイメージがある。何しろ、「休眠」は「休む」「眠(ねむ)る」と書くのだ。

たくましい雑草の戦略が、「休む」「眠る」というのは、情けないような気もするが、そうではない。②<u>「休眠」は雑草にとって、もっとも重要な戦略の一つなのである。</u>

休眠は、すぐには芽を出さないという戦略である。

野菜や花の種子は、播けばすぐに芽が出てくる。野菜や花の種子は人間が適期(てっき)を見定めて播いてくれる。そのため、すぐに芽を出すことが得策なのである。芽を出す時期は、人間が決めているのだ。

しかし、雑草の種子は発芽のタイミングを自分で決める必要がある。

雑草の種子が熟して地面に落ちたとしても、それが発芽に適しているタイミングとは限らない。たとえば、秋に落ちた種子が、そのまま芽を出してしまうと、やがてやってくる厳しい冬の寒さで枯(か)れてしまう。また、まわりの植物がうっそうと茂(しげ)っていれば、芽を出しても光が当たらずに枯れてしまう。

いつ芽を出すかという発芽の時期は、雑草にとっては死活問題なのである。

（稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』筑摩書房 第三章による）

※酔狂…好んで風変わりなことをすること。物好きなこと。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「種子を播いても芽が出ないのだ」とあるが、なぜ雑草の種子を播いてもなかなか芽が出ないのか。適当なものを選びなさい。

ア　雑草は勝手に生えてくるものであって、雑草を育てることはできないから。
イ　他の雑草が芽を出してしまうので、種子を播いた雑草は枯れてしまうから。
ウ　人間が種子を播くときに、発芽に必要な三つの要素のうち、どれかが欠けているから。
エ　雑草には休眠するという性質があり、発芽に必要な要素が揃ってもすぐには発芽しないから。

〔　　〕

(2) 本文中から、植物の発芽に必要な三つの要素を探し、書きぬきなさい。

〔　　・　　・　　〕

(3) ――線②『休眠』は雑草にとって、もっとも重要な戦略の一つなのである」とあるが、筆者がこのようにいうのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　雑草の種子は、休眠をすることで、発芽に必要な三つの要素が揃うのを待っているから。
イ　発芽の時期は生存にかかわるもので、雑草の種子は休眠によって発芽に適した時期を待っているから。
ウ　雑草の種子は、休眠によって、発芽するのに適した時期を人間に見定められないようにしているから。

〔　　〕